リージェンツ・パークにおける王立植物学協会のフラワーショーの歴史（1838–1932）

芝　　奈　穂

キーワード：王立植物学協会、フラワーショー、植物学

はじめに

1812年、リージェンツ・パークがロンドン北西部に造られ、1838年頃、その内部に王立植物学協会付属の植物園（以下、「付属植物園」と称する）（The Royal Botanic Society's Garden, Regent's Park）が建設された。付属植物園は19世紀イギリスの植物界において少なからぬ貢献を果たしたのであるが、その最盛期には、植物学の隆盛とフラワーショーの開催という二つの面において、同じくロンドンにあった王立キュー植物園（Royal Botanic Gardens, Kew）や王立園芸協会（The Royal Horticultural Society）と同等の、もしくはそれ以上の人気と名声を博した。言うまでもなく、現在、王立キュー植物園は世界遺産としても名高い世界を代表する植物園であり、王立園芸協会はチェルシー・フラワーショーで有名な園芸界の頂点に君臨する植物園である。それらに対して、王立植物学協会の付属植物園が19世紀を通じて、時代を映す空間の一つであったことは、一般誌、園芸雑誌等の定期刊行物、およびガイドブック等において広く取り上げられたことからも明らかであるが、19世紀の終わり頃から、その存在意義が急速に失われ、20世紀の初めに王立植物学協会は解散し、付属植物園も消滅した。

この不運な結末により、王立植物学協会と付属植物園については、これまであまり研究の対象とされていない。まとまった研究としては、Guy Meynell の論考がある程度である[1)]。同研究は、同協会の誕生から解散まで同植物園を軸に克明に描き出しており、本テーマについての必須の文献である。尤も、Meynell は同協会が20世紀初めに消滅した事実から、同協会の活動の中での失策の経緯を過大視するかの印象を受ける。しかし、19世紀を通じて、同協会が一時代を築いたのは紛れもない事実であり、20世紀初頭の消滅を強調するあまり、同協会の活動全体を失敗と見なす点にはやや疑いが残る。本稿では、この疑問を出発点として、王立植物学協会が19世紀の植物学および園芸学においていかに重要な組織であったのかを、その活動の最も花形的な存在であったフラ

ワーショーの開催に着目しながら探究することを目的とする。その足跡を辿りながら、最盛期には、その存在感を誇示しつつ、ヴィクトリア朝の上流社会（polite society）の一端を担ったことをも明らかにしたい。

19世紀は自然科学の発展が著しかった時代であり、自然科学のそれぞれの分野で学会・協会の組織がロンドンを中心に設けられた。とりわけ、19世紀の前半に科学の向上を目指して、1804年の王立園芸協会を手始めに、地質学会（1807年）、数学学会（1807年）、天文学会（1820年）、地理学会（1830年）等々、様々な学術団体が次々に設立された[2)]。1838年設立の王立植物学協会はこれら学会・協会の代表格であった。さらにこれらのうち、併設の庭園が必要とされるものが、植物系の協会と動物学会である。いずれも個体の収集と研究のために必須であり、前者が植物園として、後者が動物園として発展した。それらの併設庭園は、当初は植物学系協会の研究機関としての位置づけであったが、すぐに一般への開放の議論が内外から起こり、それ自体が植物学系協会の重要な宣伝施設として、認識されるに至った。したがって、その他の多くの学術団体とは異なり、単に学術施設としての性格だけでなく、パブリックスペースとしての特質も併せ持っていたという点は指摘しておく必要がある。フラワーショーは、そのような施設の最大のアトラクションとして認識されており、19世紀は、イギリス社会において、大小様々なフラワーショーが全国で開催され、人々がそれに熱中する時代であった[3)]。本稿では、付属植物園が当初担っていた植物学の学術団体という枠組みを超えて、フラワーショーの催しを通して、いかなる形で人々に利用され、ヴィクトリア朝社会に受容されるに至ったかという視点を議論の中心に据えたい。

この観点は、最近の「庭園史」（garden history）の研究方法に符合するものである。従来、「庭園史」は庭園のデザイン様式に焦点をあててきた。整形式庭園から風景式庭園への変遷というトピックは普遍的テーマであり、イギリスが誇る風景式庭園やそのデザイナーについての研究は枚挙に遑がない[4)]。それぞれの庭園についても庭園デザインの観点から多く論じられてきており、植物園についての研究においてもそれは例外ではない[5)]。しかし、近年、Kate Feluś や Clare Hickman の研究[6)]に代表されるように、個々の庭園が人々によってどのように利用されてきたかという側面に光が当てられるようになった。この視座に立ち、限られた階級にのみ開かれていた付属植物園の利用のされ方について考察することは、植物園というものが社会にどのように受容されたかという側面をよりよく捉え得る一助となろう。付属植物園利用者は、王立植物学協会の会費を払うメンバーに限られ、しかも、そのメンバーは王室を含む上流階級が主流を占めた。来園者の目当てはフラワーショー等のイベントであり、それが上流社会の行事（social calendar）に組み込まれていった。これらが具体的にいかなるものであったかについて、細部にわたって見ていきたい。

王立植物学協会と付属植物園については、前述のとおり、二次文献は少ないものの、

一次史料は、国立公文書館のリージェンツ・パーク関係文書中、王立植物学協会に関する文書、さらに、ウェストミンスター市文書館にも王立植物学協会に関する一連の史料があり、それらの史料において、付属植物園の利用のされ方、とりわけ、開催されたフラワーショーについて分析することは可能である。また、前述のとおり、定期刊行物において、付属植物園やフラワーショーに関する記述や挿絵は比較的豊富にあり、それらが一級の史料を提供してくれる。ほかにも、ライバル関係にあったキュー植物園や王立園芸協会についての研究は数多くある[7)]。さらに、19世紀におけるフラワーショーの発展については、Brent Elliott による優れた論考があり、同著者による王立園芸協会に関する大著の中にもフラワーショーに関する記述を見出すことができる[8)]。付属植物園とフラワーショーに関する一次史料をそれらの類似組織やフラワーショー全般に関する論考と照らし合わせながら、分析を試みることとしたい。

1．王立植物学協会の設立と付属植物園の建設

1838年、植物学協会が設立され、同協会および付属植物園の場所の選定が行われた。リージェンツ・パークの中央近くにあたる円形の18エーカーからなるインナーサークルに同植物園を設置することが決定され、翌1839年、森林局にリース申請を行い、森林局から31年間のリース期間で許可が下りている。当該パークは、1811年頃から、王室歳入増を目的に森林局が主導した上流階級向け高級賃貸住宅地の開発に端を発するものであるが、同協会の発足と同じ頃、1841年に緑地の一部が公園として一般開放される運びとなり、ロンドン中心地へのアクセスの良さとその風景美ゆえに、プライムスポットとして注目された。設立されたばかりの植物学協会が当該パークに付属植物園の開設を目指したのは、同協会の名声を高める目的に叶うものであった。すでに1828年には動物学会（Zoological Society）が、当該パークの北側に動物園を開園しており、それに続いて当該パークに学術団体の庭園が設置されたことになる。敷地が選定されるやいなや、1840年には植物園の設計図が描かれ、早速建設が行われた。1841年、勅許状（Royal Charter）を経て、協会の正式名称が「王立植物学協会」（Royal Botanic Society）となった。その後、付属植物園は、リース期限が切れるたびに、リース延長が行われ、1932年に同協会が消滅するまで続いた[9)]。

協会は会長、副会長以下、パトロンおよびフェローから構成されている。会長は、リッチモンド公爵が初代会長を務めて以来、貴族から選出されており、複数の副会長も軒並み貴族や名士たちが占めている。1841年に協会から出されたフェローのリストを見ると、500名近いフェローが在籍していたが、彼らもまた中流階級以上で、大半が上流階級であることは間違いない[10)]。リストには、リージェンツ・パーク周囲のテラスハウスの住人も散見され、当地の上流ぶりは明らかである。さらに、最大の後援者ヴィクトリア女王をはじめ、王族や大貴族が後援者として名を連ねている。彼らの他に多くの

サブスクライバー（subscribers）がおり、フェローとサブスクライバーの会費がフラワーショーのチケットの売却とともに、同協会の主な財源となった。言い換えれば、王立植物学協会および付属植物園にはフェローかサブスクライバーとして会費を払うか、フェローたちからの紹介でチケットを購入しなければ入園できず、エリート主義のはなはだ強い団体であった。

同協会の事務的業務は秘書のジェームズ・サワビー（James de Carle Sowerby, 1787–1871）が行い、一方で、同協会および付属植物園の設計と運営は、著名な園芸家で庭園デザイナーでもあったロバート・マーノック（Robert Marnock, 1800–1889）が一手に引き受けた。マーノックはシェフィールド植物園芸学協会（Sheffield Botanical and Horticultural Society）のキュレーターを務めた経験があり、王立植物学協会においても、付属植物園の設計を行った後、キュレーターとして同協会の運営に長年尽力した。

1839年の森林局へのリース申請に際して、同協会は11項目からなる設立趣旨書（Prospectus）を作成しており、以下の抜粋に見るとおり、そこに同協会の目的が明確に表示されている[11)]。第一に、付属植物園、図書室、博物室、スタジオ、栽培室および温室を伴った組織であること、第二に、付属植物園のために選択された敷地、すなわちリージェンツ・パーク内の18エーカーからなる敷地は、「地球上のいくつかの地域に生息する植物」の育成のために使用されること、第三に、この国においては必須となる温室が建設され、広大な芝地、テラス、遊歩道たるプロムナードが、花壇や噴水、銅像、寄せ植え鉢等とともに導入されること、第四に、水中植物の成長に十分な湖が造営され、湖の縁には岩が置かれること、第五に、植物のコレクションは、「人工的」および「自然的」な二つの分類法によって整備されること、第六に、医学的植物学的庭園を目指すこと、第七に、有益とみなされる植物の育成を目指すため、芸術と製造に適用され得る植物の収集を内外から行うこと、第八に、植物学図書館と博物館が併設されること、第九に、科学の発展につながるPublic Botanic Exhibitionsが実施され、そこで、花屋や園芸家が貴重な植物の見本を得ることができ、またそれらの植物が展示されること、第十に、研究のため、植物学者や医学生、芸術家、庭師、製造者たちに十分な機会が与えられること、第十一に、会長や理事会は、フェローやメンバーから構成されることであった。

これらを端的に表すならば、その目標の最たるものは、植物学の推進とその知識を医学、芸術、製造業、農業等に応用させることであった。その目的の遂行のため、世界中から植物を集めることを重要課題に掲げた同協会は、北アメリカ、チリ、ヒマラヤ、ネパール、シベリア、アジア、西インド諸島等から植物を収集した[12)]。Public Botanic Exhibitionも、付属植物園においては、その目的のために供されるものであった。これが、本稿で扱うフラワーショーである。マーノックは、「horticultural and floricultural exhibitionはここ近年、この人口密度の高い島国の住人たちの趣味とレクリエーション

的追求に変化をもたらした」と述べ、かつては、「牛攻めや闘犬……等がアミューズメントであったが……Floricultural Exhibition がそれらを凌駕した」として、exhibition の利点を挙げている[13)]。

マーノックによるデザイン（図１）は、協会の趣旨に合うよう、リージェンツ・パーク内の決して広大ではない18エーカーの敷地に、全ての施設をレイアウトし、諸外国から集められた膨大な数の収集物を栽培し、かつ、Public Botanic Exhibition を開催するための場所についても考慮に入れたものであり、システマティックで巧妙なデザインとなっている。それでいて、装飾的庭園としての要素も併せ持っており、同時代の著名な庭園デザイナー、エドワード・ケンプ（Edward Kemp）も、「おそらく、首都の近隣において、この種のもののどれよりも優れている」と称賛している[14)]。南側の入口からまっすぐに伸びる主要道があり、その行き着く先に、1846年に建設されることになる巨大温室ウィンター・ガーデン（Winter Garden）が鎮座している。入口近くの東側には湖が掘られ、その土を利用して、湖の周辺に築山マウンドが形成された[15)]。主要道を挟

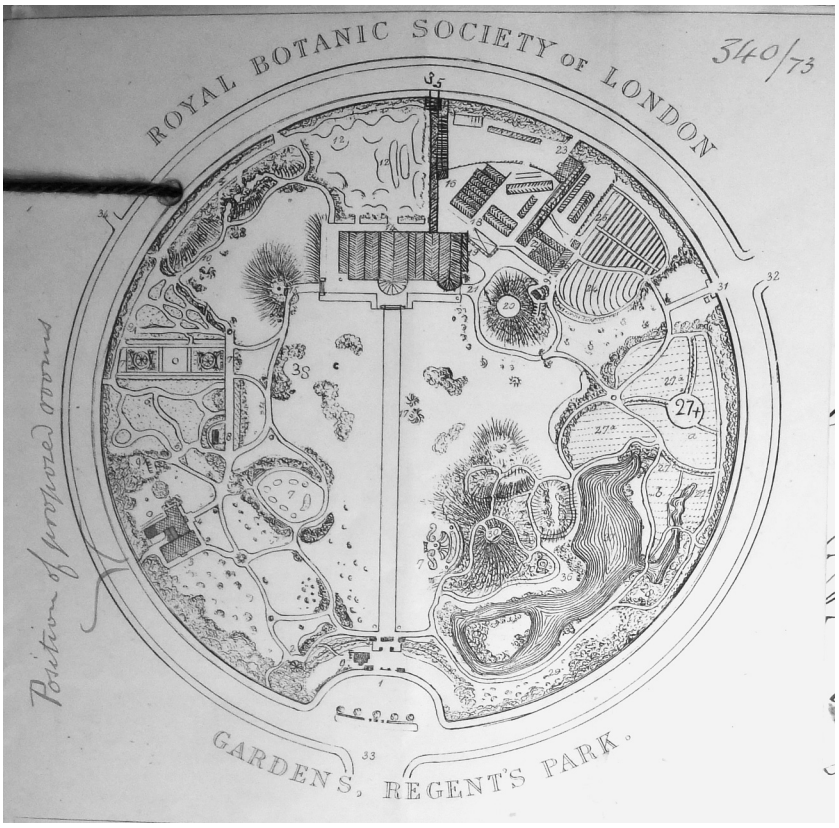

図１　Royal Botanic Society’s Gardens, Regent’s Park designed by Robert Marnock
［出典：The National Archives, Cres 35/3398］

んで、湖の左右対称にあたる側は、芸術や製造業、農業に利用するための植物の栽培地となっている。他に医学に応用させるための植物の栽培地は巨大温室近くの区画にレイアウトされている。この洗練されたデザインにおいて、次節で見るとおり、exhibition用の敷地として、ウィンター・ガーデンの周囲が最初から想定されており、その点にもマーノックのデザイナーとしての力量を見ることができる。

２．付属植物園におけるフラワーショー

付属植物園が建設され、小温室や講義室、資料館等の設備が整い、植物が供給されると、王立植物学協会の主眼は、exhibition や *fête* と呼ばれるフラワーショーの開催へと移った。1843年に最初のものが行われてから、同協会が解散するまで、フラワーショーは毎年複数回開催された。しかし、このフラワーショーは、同協会のオリジナルというものでは決してなかった。Elliott が論述するように、フラワーショー自体の歴史は、17世紀まで遡る。アマチュアの花の栽培家たちからなるフローリスト協会（florist societies）によるフラワーショーが開かれており、チューリップ、カーネーション、ナデシコ、オーリキュラ、ポリアンサス、ヒヤシンス、アネモネ、ラナンキュラスの８つの伝統的なカテゴリーで競われ、それぞれのカテゴリーで一等、二等、三等が選定された[16)]。そのようなフラワーショーが最も制度化され、一般に流布したのが19世紀であり、その先陣を切ったのが、冒頭でも触れた王立園芸協会である。1804年に設立された同協会において、当初は、会員たちが持ち寄った花や果物の品評会が行われていたが、1831年以降、ダリヤ、パイナップル、メロン、ツバキ、シャクナゲ、アザレア、バラ、そしてブドウのコンテストが年間を通じて開かれるようになった。1833年には、当時、同協会が所有していたロンドン郊外のチジック（Chiswick）の植物園でコンテストが開催されるようになり、それ以降、植物園の場所が、サウス・ケンジントンに移籍される1861年まで、チジックでのコンテストが、フラワーショーのモデルとなった[17)]。

遅れること約10年、王立植物学協会がフラワーショーを開催するようになったが、その開催時期やカテゴリーの決定、審査方法等は、王立園芸協会のそれをかなり模倣したものであった。開催時期は、夏の５、６、７月の３回であり、それぞれの花や果物のいくつかの部門に分かれて審査が行われ、優れた植物を提供した苗業者や園芸家等の受賞者にゴールドメダル、シルバーメダル、シルバーの花瓶、その他プレート等が式典で授与された。また、授与式の後は、受賞品がフェローやサブスクライバーたちを中心に一般公開され、人々が花々を鑑賞しながら社交を楽しむ花のフェスティバルが続いた。これら一連の行程は、王立園芸協会のそれと同様、しばしば雑誌や新聞等のメディアに取り上げられた。

これらのメディアのうち、一般誌ではなく、植物学や園芸、庭園等の専門誌において

は、exhibition の出品物と受賞品、すなわち、当フラワーショーの前半部分が詳述されている。たとえば、来訪者が10,000人であった1856年 7 月 9 日の exhibition において、雑多な果物コレクション部門では、下院議長の庭師である Tillyard 氏が一等に輝いた。彼のコレクションは、ピーチ、 3 つのパイナップル、グレープ、メロン、チェリー、ラズベリー、いちじく、ストロベリーから成っていた。二等は Sutherland 公爵の庭師 Fleming 氏が獲得したが、彼のコレクションはグレープ、 4 つのパイナップル、ピーチ、ネクタリン、プラム、チェリー、いちじく、メロン、ストロベリーで構成されていた。パイナップルの展示については、部門が細分化されており、 4 つのパイナップルのコレクション部門では、 3 人の出品者がいて、Dowlais 製鉄会社の庭師 Jones 氏が一等を、Bicton Park の Barnes 氏が二等、前述の Fleming 氏が三等を獲得している。最高品の部門では、18人の出品者のうち、前述の Barnes 氏が一等を獲得している。緑の果肉のメロンには 2 人のエントリーが、真紅色の果肉のメロンには 7 人のエントリーがあり、併せて、Miss Trail の庭師の Williamson 氏、Bailey 氏、M’Ewen 氏、前述の Fleming 氏、Tegg 氏等が受賞した。花のコレクションについても同様に、いくつかの部門に分かれて審査が行われた[18)]。

これらの記述からこのイベントが花や果物等植物に関するコンテストであるという当たり前の事実が浮かび上がる。また、これらの植物系雑誌には宣伝も多く掲載されているが、しばしば宣伝者個人の受賞歴が記載されており、exhibition の存在が出品者にとって、宣伝効果という意味でいかに重要視されていたかを物語っている。exhibition のカテゴリーは、一種だけを競うものもあれば、コレクションを競うものもあり、また、いくつかの部門で出品者の顔ぶれが似通っていることから、Fleming 氏等の有力な出品者は、複数の部門に出品して受賞を目指していたことも明らかである。そこにはコマーシャリズムの動きを見て取ることができる。また、王立植物学協会側もフラワーショーの開催に際して、手入れの行き届いた珍奇な植物を当園に集めるためには、苗商人や園芸生産業者等の協力が必須であった。メダル授与の栄誉と引き換えに彼らから植物をフラワーショーに提供してもらったのである。園芸業者側からすれば、メダルを授与されると、上述のように、広告等でそれを知らしめることができるわけで、双方にとって、利益があったと言える。Elliott も、園芸業者が自身の植物を提供することでフラワーショーの運営を助けたことに対して、フラワーショーが「好意的な宣伝のチャンスと自身の抱える在庫品の展示の機会を与えたからである」と述べている[19)]。フラワーショーの様子は、メダル授与の結果とともに、雑誌、新聞、学術雑誌等で広く報道されたため、宣伝という意味合いにおいて、同協会の存続、ひいては植物業界全体の繁栄と結びついており、労働者階級の庭師たちの協力を必要とする exhibition という形が最適であったと考えられる。

他方、専門誌ではない一般誌や新聞における同協会のフラワーショーの描写は、当日

の後半部分に焦点が当てられており、全く別の様相を呈している。とりわけ、*The Illustrated London News*（以降 *ILN* と略し、該当の日付は本文に括弧つきで記す）は挿絵入りで報じていることが多く、そのイベントの最も華やか部分を把握するには最適である。1843年5月24日の水曜日に行われた同協会として最初の exhibition を「最大のアトラクションは花の存在である」（*ILN*, May 27, 1843）と表現していることからも分かるとおり、このイベントは花の祭典であった。Exhibition における花々の展示は、広々とした複数の大テント（marquee）内で行われたが、これも王立園芸協会等のやり方を倣ったものである。それらのテントは、付属植物園入り口から直線に伸びる主要道の行き着く場所で、あらかじめ展示用敷地としてレイアウトされていた場所に *fête* のためだけに設置されたものであり、テント内部には、花が鉢植えで配置されるのが通例であった。それらの花は、年によって、また、5、6、7月のそれぞれの月によっても、若干異なるが、同協会最初の exhibition では、アザレア（azaleas）、ペラルゴニウム属（pelargonium tribe）、ツツジ科およびラン科の見本（ericaceous and orchidaceous specimens）キンチャクソウ科の多年草カルセオラリア（calceolarias）、フクシア（fuchsias）、サンシキスミレ（heartsease）、バラ（roses）等が展示された。別の年、1848年の7月のフラワーショーでは、ナデシコ（pinks）、カーネーション（carnations）、ピコティ（picotees）、複数のラン科植物、袋葉植物（the pitcher plants）やバーベナ（verbenas）等が展示された（*ILN*, July 8, 1848）。6月のフラワーショーについては、1864年のものが *ILN* で詳しく描写されており、アザレア、ペラルゴニウム、カルセオラリア（calceolarias）、ラン、ヒース（heaths）、シダ（ferns）等が展示された（*ILN*, June 18, 1864）。1859年頃からは、夏のフラワーショーに加え、春のフラワーショーも開かれるようになった[20]。1866年3月のフラワーショーで展示されたものは、ヒヤシンス（hyacinths）、チューリップ（tulips）、スイセン（narcissus）、シクラメン（cyclamen）、バラ、シャクナゲ（rhododendrons）等であった（*ILN*, March 24, 1866）。それぞれのフラワーショーで、内容や組み合わせを変えようとする主催者側の苦労を垣間見ることができる。

ILN は、また、どの年のフラワーショーについても、軍楽隊が音楽を奏で、exhibition を盛り上げる様子を取り上げている。軍楽隊は、ホースガーズ（the Horse Guards and the Blues）の時もあれば、ライフガーズ（1st and 2nd Life Guards）の時もあり、また、演奏内容も、国歌から、軍歌、オペラ、人気の歌と幅広く、年によってテーマがあったと推察される。さらに、記事では、付属植物園内の展示が行われているテントの周囲だけでなく、同植物園のその他の特筆すべき場所についても触れていることが多く、たとえば、ロック・ガーデンや盛り土で築山にしたマウンド、湖の周辺の散策路、また、1846年に建設されたガラス張りの巨大温室ウィンター・ガーデンについてもしばしば描写しており、そこから人々が花々の展示を鑑賞しつつ、園内の散策も行っていることがわかる。1847年の *ILN* の記事に添えられた挿絵（図2, *ILN*, June 12, 1847）では、手

図 2　Fete at the Royal Botanic Society's Garden, Regent's Park—*The Illustrated London News*, 12 June 1847
［出典：Look and Learn / Peter Jackson Collection］

前に小舟が浮かぶ湖、中央奥には建設されたばかりの巨大温室ウィンター・ガーデン、右手にはテント、左手にはマウンドが見受けられる。これらの記述および描写から、主催者側が人々を惹きつけるために、花の祭典を盛り上げるべく、さまざま工夫を凝らしている様が浮かび上がる。

私的学術団体である同協会は、前節で触れたとおり、王室メンバーをパトロンに持ち、理事会も貴族やジェントルマン、そして中流階級以上の富裕層から成っており、その植物園の入園にはフェローおよびサブスクライバー以外は、フェローたちからの紹介が必須となっていた。入場チケット料金は、前売り券が 5 シリングであり、当日券は 7 シリング 6 ペンスであった（*ILN*, June 29, 1844）。したがって、入場者は、「多くの上流社会の一行」（*ILN*, July 15, 1843）や「最も高位の人々のうちの多数」（*ILN*, May 27, 1843）で占められていた。その際たるものが、王室のメンバーたちである。1843年 5 月の同協会最初のフラワーショーは、王室からはジョージ 3 世の七男、ケンブリッジ公夫妻とオーガスタ王女が来賓であった（*ILN*, May 27, 1843）。翌1844年 5 月に開催された exhibition では、一般人の来園に先駆けて、ヴィクトリア女王とアルバート公が、ドゥエロ侯爵夫人やバックリー大佐、ボーヴェリー大佐とともに来園し、会場視察を行っている（*ILN*, May 4, 1844）。*ILN* ではしばしば、花の祭典としての当イベントの豪華さと

軍楽隊による音楽の陽気さをエレガントな上流階級の装いと対比させ、このイベントの格調の高さを表現している。たとえば、1846年6月のexhibitionでは、「その日のすばらしさを超えるものはなかった。あらゆる流行と多様性を兼ね備えた衣装に身を包んで整列したご婦人たちは栄光に満ちていた……その光景は見事で非常に陽気に満ち溢れており、活気あるオペラ曲を演奏する3つの軍楽隊によって、歓喜は究極に達していた……ショーは壮観で、受賞した展示品は、以前のものよりも変化に富んでいた。……人々は、花々の色合いの豊かさと繊細さに見入っていた。しかし、来訪者たちに多くの楽しみを与えたのは、ご一行の晴れやかな様であった。というのも、貴族たちの優雅さと洗練された婦人用ボンネットがこれほど壮麗に調和することはほとんどないからである」（*ILN*, June 6, 1846）と評している。

二種類の異なる刊行物から、花を媒介として、一方では商人や庭師たちによるコマーシャリズムの世界が存在し、他方で、花を中心としたエンターテイメントが広がっていることが感得され、フラワーショーの多層性を物語っている。とはいえ、出品者の大半が、上流階級のカントリーハウスに属する名のある庭師であることに着目すると、さらに、フラワーショーが上流階級の文化を象徴したものになっていることが指摘できる。フラワーショーの観客たちが上流階級であったことに加えて、このイベントの裏方たちである出品者たちの裏にはやはり上流階級がいることがわかる。フラワーショーは上流階級のエンターテイメントたるイベントであったことは明らかである。

キュレーターのマーノックは付属植物園のデザインから運営までの全てを司った人物であり、フラワーショーの開催においても全てを掌握していた。彼は植物園の設計のみならず、フラワーショー会場設営でも見事な腕前を披露した。Elliottは、マーノックが1849年に、シャクナゲを専門とする苗木栽培業者のジョン・ウォータラー（John Waterer）とともに、シャクナゲだけのフラワーショーを行ったことを特筆し、彼らは、１つのカテゴリーだけの展示という難題に対処するために、複数の鉢植えの「シャクナゲの塊を、マウンド上に設置して、庭の植え込みに似せようとすることで……とりわけ美しい展示を行うことに意を注いだ」と述べている[21)]。実際、当時の様子を描写した*Gardeners' Magazine of Botany*の挿絵からは、シャクナゲの塊が円錐台の鉢植えに入れられて、マウンドのスロープ上のあちこちに置かれている様子が見受けられる[22)]。1851年にもウォータラーとマーノックによる同様のシャクナゲの展示が行われ、巨大なシャクナゲ（“Monster Rhododendron”）がカルミア（Kalmia）やアザレアとともに展示されている挿絵が添付されている（*ILN*, July 5, 1851）。これらは、「アメリカの植物」（American plants）としてこの頃から人気を博したもので、それらを特集したexhibitionがしばしば開かれた。

マーノックのデザインに関する才能が最もよく現れたのが、1854年のフラワーショーであろう。従来は、いくつかのテントに花々が分けられて展示されていたが、この時は

一つの大幕の下に全ての展示品が集められた。*ILN* では、そこには、「エレガントでピクチャレスクな配置」（“the elegant and picturesque arrangement”）が施され、「グルーピングによるセンスのよい配置と、自然界の豪華な産物によっておびただしく覆われた起伏に富む表面が、以前の方式に取って代わったその巧みな方法は、マーノック氏への評価を高めた」と述べられている（*ILN*, May 27, 1854）。この極端に仰々しい記述と添えられた挿絵（図 3 ）から、一つの天蓋のもと、多様な種類の花を一つの鉢植えに混ぜるのではなく、一種類の花を一つの塊として鉢植えに集め、その鉢植えの配置が、波打つように、ゆるやかな高低差を描きながら、端から端までレイアウトしている様子を窺うことができる。以前は、花壇に植える場合も、個々の花を「混合させ」ていたが、19世紀は花々を一つの塊として「集合させる」方式が流行し、さらに、樹木や花壇の花々の境界線がゆるやかな起伏を持つようにレイアウトする時代であり[23]、それがまさに「ピクチャレスク」なデザインの真髄であった。マーノックはこれをフララーショーにも応用したと言える。

最も盛況だった1850年代および1860年代半ばを経て、1870年代に入ると、フラワーショーはマンネリ状態が顕著となった。*ILN* の記述においても、天気の話題から始まり、上流階級の服装、展示品の花々の名前、軍楽隊による音楽等、内容は甚だしく類似していた。この状況から脱するため、同協会は従来のフラワーショーに加え、1872年 6 月

図 3　Exhibition of the Royal Botanic Society, Regent’s Park—*The Illustrated London News*, 27 May 1854
［出典：Look and Learn / Peter Jackson Collection］

から evening fête と呼ばれる催しを開始した（図４）[24]。内容はフラワーショーを応用したものであるが、夜に行うことから、照明が必須となり、それがより幻想性を醸成させるものであったらしいことは、同年７月の記事からも明らかである（*ILN*, July 20, 1872）。巨大温室やいくつかのテントでは、上流階級の一行が大勢集まったが、特に多くの人々が午後11時頃に到着し、同協会の現会長でもあるテック公（The Duke of Teck）を含む王室メンバーたちは、11時半頃到着している。特筆すべきは、さまざまな光の演出であり、ところどころに設置された白色の石灰光（lime light）は近隣を照らし、一方でオイルランプ（oil lights）は入口からの直線主要道を照らし、午後10時以降は30分毎にマグネシウムやその他の色の光が湖に灯され、それらにより華やぐ様子が詳細に描写されている。また、音楽もその光景を彩るもので、巨大テント内では、第一ライフガードが、巨大温室ウィンター・ガーデンでは第二ライフガードが、そして、「アメリカの植物」のテントでは、The Royal Caledonian Asylum がそれぞれマーチやその他の音楽を演奏した。

内容は従来のフラワーショーとほとんど変わらなかったが、より娯楽性が増しているように見受けられる。それは、文中の「Vauxhall の過去の栄光を思い出させる」（*ILN*, July 20, 1872）という一文によく表されている。ヴォクスホール・ガーデンズ（Vauxhall Gardens）は、18世紀にロンドンで流行したプレジャー・ガーデン（pleasure garden）の中で最も有名なものであった。プレジャー・ガーデンとは、音楽演奏、花火、気球の打

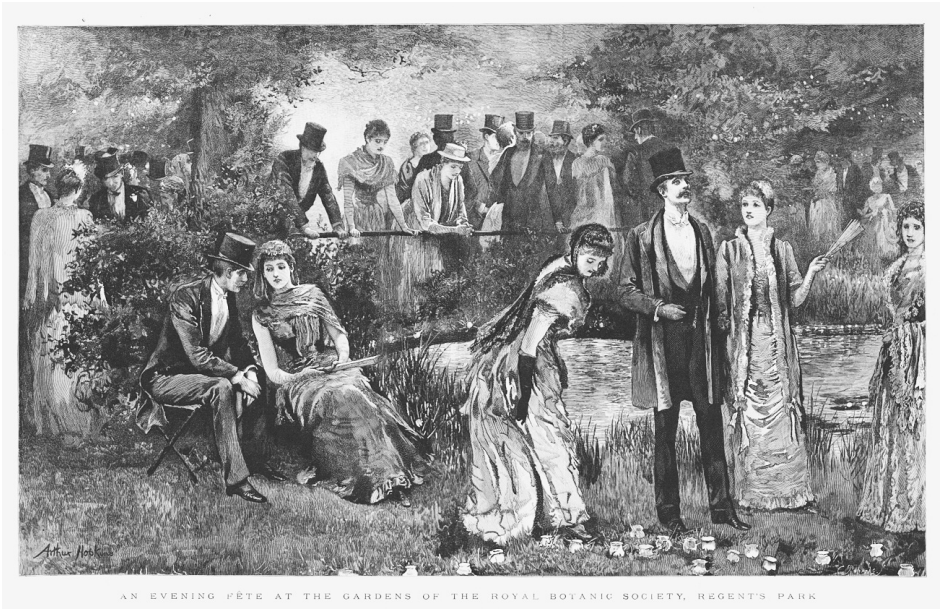

図４　An Evening Fete at the Gardens of the Royal Botanic Society, Regent's Park—*The Graphic*, 16 July 1887
［出典：Look and Learn / MegaMaxArt］

ち上げ、ダンス等を売り物にした商業的な遊園地であり[25)]、上流階級向けに遊興の機会を提供したが、売春や粗野な社交も流行り、多くは1850〜1860年代にかけて閉鎖された。リスペクタビリティを重んじるヴィクトリア朝文化には相容れないものであったとしばしば評されるが、時期的にちょうど植物園の最盛期にプレジャー・ガーデンが衰退しており、同じ上流階級向け社交空間でありながら、粗野なプレジャー・ガーデンから、より高級な植物園での娯楽に切り替わったということができる。とはいえ、1870年代の evening fête においては、退廃的なムードが見え隠れしないわけでもなく、上流階級の社交と出会いの場であったことが指摘できる。

この傾向は1890年代前後に、さらに加速する。1889年７月、同協会の50周年を記念して、「バラの祭りと花のパレード」（a feast of Roses and a floral parade）が行われた（図５, *ILN*, July 27, 1889）。これは、カートや乗り物等を花いっぱいに飾り、パレードを行いながら、その豪華さを競うもので、フランスのカーニバルで行われるものを真似たものであった。パレードは、王冠から荷台、子馬まで40種類の乗り物や事物が、入口から奥までの直線主要道を行進しながら行われ、一番奥には台座が置かれ、皇太子妃がそこで、賞を授与した。受賞した乗り物は、見事な色合いの花で飾られており、鞭は大量のハルシャギクで飾られ、車輪は赤と白の花で彩られていた。他には、何千ものジャッ

図５　The Feast of Roses at the Royal Botanic Society’s Gardens, Regent’s Park—*The Illustrated London News*, 27 July 1889　［出典：Look and Learn］

クミノットローズ（Jacqueminot Roses）で覆われた非常に装飾的な乗り物や、白、ピンク、黄色のバラでそれぞれ彩られた荷台、片方のボディを白のバラで、もう片方を赤のバラで覆って、バラ戦争の「ヨーク家とランカスター家」を表したものもあった。大きなテントでは、バラの exhibition が行われた。パレードおよび exhibition のイベントには10,000人が集まり、チケットは完売であった[26)]。この年の総収入は、昨年度より約£2,000増の£7,378 13s. 6d. であったが、そのうち、exihbitions による売り上げが£4,022 6s、次いで、会費収入となっている。この年の盛況ぶりは、この「バラの祭り」に帰するところが大きい[27)]。翌年以降もこのイベントは、通常のフラワーショーおよび evening fête と並んで継続された[28)]。

付属植物園は19世紀後半において、本論のテーマである「利用のされ方」からみる限り、フラワーショーを通じて上流階級の社交空間となったことは上述のとおり明らかである。Pamela Horn によれば、 4 月から 6 月のロンドン社交会シーズン（the London Season）は上流階級の行事の中心を占めており、アルバート・ホールでのコンサート、アールズコートでのドッグショー、ロイヤル・アカデミー・オペラ、ロンドン・ポロ・シーズン、ご婦人用ゴルフチャンピオンシップ、ダービー・エプソン・サマーレース、リッチモンド・ロイヤル・ホースショー、ロイヤル・アスコット・レース、ローンテニス・チャンピオンシップ、絵画展等のイベントが目白押しであった[29)]。本書において、上流社会の行事として記載されているのが、スポーツや芸術等の行事であり、植物園のフラワーショーは取り上げられていない。しかし、ここにフラワーショーを追加することは可能であろう。また、Horn が参照した史料の一つに、Lady Frederica Loraine の日記が挙がっているが、その日記には、彼女が子供たちを連れて、“the Zoo or the Botanical Gardens” に行ったことが簡潔に述べられている。この Zoo とは前述のロンドン動物園のことであり、同じリージェンツ・パーク内にあった。また、その間、夫は、海軍クラブに行くかレースに参加しており[30)]、動植物園への興味は主に女性の方にあったと推察することはできるかもしれない。とはいえ、*ILN* 等の描写を見る限り、男も女も参加しており、それが社交の空間であり、ロンドン社交会シーズンの一環であったことは確実であろう。

それは言い換えれば、排他的空間であったということは指摘するまでもない。前述のとおり、会費を払った者のみが、入園できる資格を持ち、fête のチケットを購入して、入園するという流れとなっていたわけであり、一般人への開放は意図していなかった。一般開放へのプレッシャーは絶えずあり、特に19世紀の終わりから20世紀の最初にかけて、同協会の排他性はしばしば糾弾されている[31)]。にもかかわらず、頑なまでにも階級制を維持し続けた理由は、パトロンからの会費確保という点にある。概ねどの年の収支報告を見ても、パトロンからの寄付や会費が協会の最大の収入であり、次いで、fête の入園料となっている[32)]。寄付等を獲得するためには、魅力あるイベントを行い、常に

会員を保持し続けることが肝要であった。植物園という性格を考慮するに、中核となるのは花や果物のフラワーショーであり、それを上流階級の行事という排他性をもって行うことが、会費確保の面で必須であったという点は想像に難くない。フラワーショーのため、労働者階級の庭師たちが重要な役割を果たしていたことは、上で触れたように、否定できない。とはいえ、フラワーショーは、その主たる対象である上流階級と縁の下の力持ちである労働者階級が交流し合う場であったとは考え難い。フラワーショーを楽しむ上流階級と花々を提供する庭師らの間の交流等について触れた新聞雑誌記事は、管見では見当たらない。あくまでもフラワーショーは、上流階級のエンターテイメントであった。

３．19世紀の植物界における位置づけ

19世紀は植物園の全盛期であり、全国の多くの植物園でも規模の違いはあれ、フラワーショーもしくはそれに準ずるものが開催されていた。地方においては、地主階級や名士たちを対象としたものから、労働者階級のためのフラワーショーもあり、前節で見たとおり、階級意識が色濃く現れている。とりわけ、ロンドンでは、前述のとおり、春から夏にかけて、それぞれの地所からロンドンへと押し寄せる上流階級を対象としてフラワーショーが複数開催され、それらが互いにライバル関係にあった。

19世紀を通じて影響力の大きかったロンドンにおけるフラワーショーの中で、最も古い歴史を持つのが、前節の冒頭で述べたロンドン郊外のチジックで開催された王立園芸協会のフラワーショーである。同様に人気のあったのが、クリスタル・パレス・パーク（Crystal Palace Park）のものである。当該パークは、1851年第一回ロンドン万国博覧会のためにジョゼフ・パクストン（Joseph Paxton）によって建設されたパビリオン、クリスタル・パレスを会期後にロンドン郊外のシデナムに移築し、再生させたものである。植物園ではないものの、1855年６月、パクストン自身によって計画された同パレスでのフラワーショーは大成功を収め（*ILN*, June 9, 1855)、以降、毎年開催された。

ロンドンにおいては、他にもフラワーショーがあったが、19世紀後半において、概ね王立植物学協会のフラワーショー、王立園芸協会のそれ、そして、クリスタル・パレスのものが内容と人気という観点で、三つ巴の状態であり、互いにライバル関係にあった。開催時期は、５、６、７月のそれぞれの月において、それぞれが少しずつ時期をずらし、重複しないような配慮がされており、そのこと自体に互いのライバル意識を見てとることができる。出展品についても似通っていたが、王立植物学協会のフラワーショーの様子を記した *ILN* を含む新聞や雑誌記事においては、必ずと言っていいほど、これらライバルのフラワーショーとの比較についての言及があった。たとえば、「花の展示は非常に膨大で、チジックのそれと十分匹敵するであろう」（*ILN*, May 27, 1843）とあることから、当時の社会においてもこれらのライバル関係は認識されていたのは論をま

たない。

これら三者の中で、園自体の規模が最も小さかったのは、付属植物園であり、18エーカーしかなかった。王立園芸協会の植物園の33エーカーおよびクリスタル・パレス・パークの200エーカーと比べれば、面積では全く敵わなかった。しかし、王立植物学協会は、都心からのアクセスという点で後二者をはるかに凌駕した。王立園芸協会のあるチジックは都心から約10キロメートル離れており、1869年、鉄道が付近に開通するまで不利であった。したがって、王立園芸協会は1861年に植物園をチジックから都心へと移すことを決め[33)]、サウス・ケンジントンに敷地をリースして、そこに新たな植物園を建設した[34)]。クリスタル・パレス・パークは、鉄道で行くことはできたが、それでも、付属植物園へのアクセスの良さには一籌を輸した。規模および地の利等の条件を勘案すると、付属植物園のフラワーショーは、かなりいい条件を備えており、それが、揺るぎのない名声と人気の高さに結びついていたと言えるであろう。

次に、植物園一般の機能と照らし合わせた場合、付属植物園がいかなる地位を占めていたかを見る。19世紀の植物学の発展上、頂点に立っていたのは、キュー植物園である。もともとは18世紀最初に王室の庭園から始まり、1841年にその管理が国に移管され、パブリック・パークとなり一般公開されるに至った[35)]。内外から植物を集め、植民地との一大ネットワークを築きながら植物の分類と研究の拠点として、19世紀の植物学の発展に寄与した。19世紀を通じてフラワーショーの開催はなく、正統的な科学としての植物学を推進したと言える。現在、植物学の世界の頂点に君臨し、世界遺産に指定されている。王立園芸協会は、植物学全体ではなく、主に耐寒性のある植物と果物を扱っていた。とはいえ、同協会の発行する専門雑誌 *Proceedings of the Horticultural Society of London*（1838–1843）およびその後継の *The Journal of the Horticultural Society of London*（1846–1855）、*The Journal of the Royal Horticultural Society*（1866–1975）等から見る限り、同協会もフラワーショー等の娯楽を提供しつつも、同時に専門的学問的組織としての立場も保持していると指摘できる。植物学の発展に貢献するという点においては、キュー植物園の次に位置すると言うことができそうである。

他方、王立植物学協会は、学問としての組織という観点においては、前二者の後塵を拝している。確かに、同協会も学問的活動は行ってはいる。*Annual Report* や *Quarterly Record* の発行および専門家を招いての講義の提供等を行っている。たとえば、1886年には、種子や花の器官についての講義や葉の機能および草花の繁殖についての講義がなされており[36)]、植物の育成について多くの関心を寄せていた様子が窺える。また、気象情報も毎日記録していることから、科学としての植物学の発展に寄与しようとする意気込みは見受けられる[37)]。木材やゴム等の経済的に利用できる植物（economic plants）や医療に応用できる植物（medical plants）についての記述も *Annual Report* 等において散見される[38)]。また、19世紀の終わりから20世紀にかけて、植物学を専攻する学生たち

の入園も許可しており、教育の分野にも力を入れていることがわかる。さらに、付属植物園には、フラワーショーに出される花々だけでなく、多くの珍しい植物が各地から集められ、直植えや巨大温室での栽培が行われたことも、記録から読みとることができる。1840年代から1860年代に限っても *ILN* 上で、諸外国から当地の植物園にもたらされた植物を列挙するならば、サボテン科の the Cactus speciosissimus（*ILN*, May 27, 1843）、カトレヤ（The *Cattleya*）やカトレヤ・モッシェ（*C. Mossiae*）、トリコケントルム属の The Mexican *Oncidium Lanceanum* 等のラン類（*ILN*, July 8, 1848）、ヒマラヤのシャクナゲ（The “Himmaleh Rhododendrons”, *ILN*, June 9, 1849）、1849年にパクストンによって確認されたラン科の *Coelogyne lowii*（*ILN*, June 23, 1849）、ガマズミ属の木（Viburnum, *ILN*, June 8, 1850）、ヴィクトリア朝の人々を熱狂させたオオオニバス（*Victoria regia*, *ILN*, June 15, 1850）、中国のしだれヒノキであるシダレイトスギ（*Cupressus funebris*, *ILN*, June 7, 1851）、開花したアメリカンアロエ（American Aloe, *ILN*, October 23, 1858）（図６）、アガベ属の Agave Yuccefolia（*ILN*, December 17, 1859）、Prussian globe と呼ばれた球状のパイナップル（*ILN*, July 12, 1862）、アガベ属 Agave fourcroya（*ILN*, June 18, 1864）、エリカ（Cape heath, *ILN*, May 12, 1866）、ビロウヤシ（Chinese palm tree, *ILN*, August 18, 1866）、ナンバンカラムシ（Chinese grass fibre, *ILN*, April 17, 1869）等が報告されている。その他にも、*Annual Report* では、さらに多くの何百もの植物を収集していることが報告されている。

しかし、それらの植物の研究や世界の植物園とのネットワークの形成にはあまり力を入れておらず、あくまでも、珍しい植物の採集にとどまっている。王立園芸協会も、冒頭で触れた Elliott 等の研究により、フラワーショー以外にも、実は研究にも力を入れていたことが明らかになっているが[39]、王立植物学協会ではそこまでの学問的活動はしていない。すなわち、同協会の植物学の発展にかかわる活動をまとめるならば、設立当時の「植物学の推進とその知識を医学、芸術、製造業、農業等に応用させる」という設立趣旨書の条項を反映したものになっており、植物学の発展に寄与したというよりは、植物学をいかに応用するかという点に重きを置いていたことがわかる。当初の協会の設立趣旨書およびマーノック自身の意図では、exhibition を植物学の発展に寄与させるという位置付けであったが、風変わりな植物や、品種改良された植物が出品されることもあるものの、純粋な植物学の推進にあまり結びついているようには見えない。付属植物園が主に社交の場として利用され、認識されるに至ったことおよびフラワーショーがエンターテイメントの側面に傾いたことは否定できないのではなかろうか。

1875年、*The Gardners' Chronicle* はフラワーショーに関する近年の動向について苦言を呈している。

> これらのフラワーショーは近頃、過度に増えている。これらの exhibitions を行うことの当初の目的は、植物栽培を促進すること、植物の育成に改善をもたらすこと、

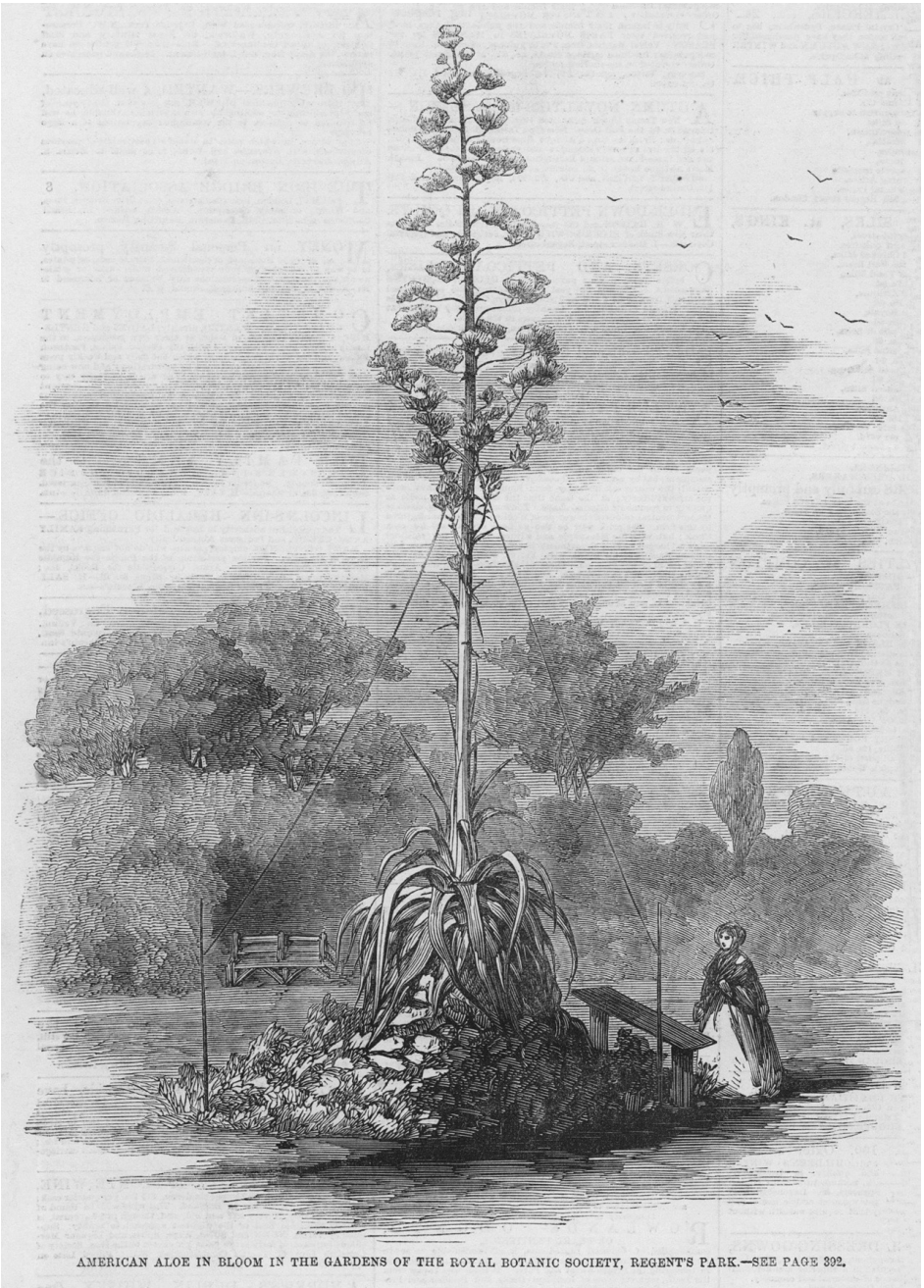

図 6　Exhibition of the Royal Botanic Society, Regent's Park—*The Illustrated London News*, 27 May 1854　［出典：Look and Learn / Peter Jackson Collection］

新しい貴重な植物を装飾の理由や実用の目的で導入することにあった。……しかし、非常に多くの場合において、これらの立派な目的が大いなるエンターテイメントをかき立てる欲望で上書きされてしまっている[40)]。

その非難すべきエンターテイメントについて、さらに深く切り込みながら、それは、「ショー」であり、「男女が戯れ合う場所であり、軍楽隊の音楽を聴く場所であり、流行の服装を見せびらかす場所」であると断罪している。そして、最後に、「今日、フラワーショーへの来園者の何人ほどが、園芸学を気にしているというのか」と結んでいる。

マーノックは第1節で述べたとおり、かつての牛攻めのような低級なアミューズメントに代わり、フラワーショーによる高級なレクリエーションを推進し、それを植物学の発展へと結びつけようとした。王立植物学協会におけるフラワーショーに対するスタンスは概ね、マーノックの当初の意図どおりに行われた。しかし、最終的にそれが、植物学の発展にいかほど結びついたかについては、やや疑問の余地が残る。王立植物学協会の存在意義は端的に言うならば、上流階級のための社交空間として、19世紀を通して、王立園芸協会やクリスタル・パレス・パーク等と渡り合いながら、フラワーショーという一つのレクリエーションを創出させたことと結論できる。この動きは社会的に見て極めて大きな、長期的な影響を与えた。

おわりに

19世紀終わりから20世紀最初にかけて、付属植物園は深刻な財政難に見舞われ、最終的に1932年に幕を閉じることとなった。Meynellは、同植物園が消滅するに至った理由として、王立植物学協会が一般への開放を最後まで拒み、上流階級のみを対象としたことを挙げている[41)]。同協会が世論からの圧力にもかかわらず、対象を広げなかったことは、本稿で焦点をあてたフラワーショーを概観するだけで自明であり、付属植物園は上流階級の娯楽および上流社会の行事の一環としての場であったことは繰り返すまでもない。より歴史の古い王立園芸協会が、1861年のサウス・ケンジントンへの移転をきっかけに、パブリックにも庭園を開放したこととは対照的である。しかし、付属植物園の消滅の原因を辿るならば、第一に財政難、第二にリース更新の失敗に帰せられる。20世紀に入ってから10年毎にリース更新の申請を森林局に提出し、いずれも度重なる交渉の末、辛くも認められたが、最後、リース更新が許可されず、1932年に解散が決定した[42)]。森林局がリース更新を拒んだ理由は、まさに同植物園の財政難にあり、したがって、財政難とリース更新の失敗はセットに考えられるべきであり、それらの理由によって、同植物園の消滅が現実となった。

オオオニバスも含め、珍しい植物の一部はキュー植物園に受け継がれ、一方で、付属植物園の跡地は、クィーン・メアリーズ・ガーデンズ（Queen Mary’s Gardens）という庭園となっている[43)]。付属植物園にあったホットハウスや巨大温室等は解体されたが、

湖、マウンド、園路等のレイアウトは現在の同庭園にかなりの形で受け継がれており、往時の姿を部分的に偲ぶことができる。

19世紀から20世紀初頭にかけて、同植物園だけが最後まで、上流階級だけを対象とした空間であったが、そのような空間として、少なくとも19世紀の間は、同植物園は、ライバル団体としのぎを削りながら、イギリスの上流社会に確固たる地位を築いたと言える。

注

1）Guy Meynell, “The Royal Botanic Society’s Garden, Regent’s Park,” *The London Journal*, 6–2 (1980): 135–46. 日本においては、新妻昭夫「英国の温室の歴史と椰子のイメージ」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告：園芸文化』, 1 (2004): 19–20が当植物園の巨大温室ウィンター・ガーデンについて触れている。

2）Roderick Floud and Sean Glynn, *London Higher: The Establishment of Higher Education in London* (London: Bloomsbury Publishing, 2000) 16.

3）Margaret Willes, *The Gardens of The British Working Class* (New Haven and London: Yale UP, 2014) 224.

4）Timothy Mowl, *Gentlemen Gardeners: The Man Who Recreated the English Landscape Garden* (London: The History Press, 2004); Michael Symes, *The English Landscape Garden in Europe* (Swindon: Historic England, 2016); John Phibbs, *Capability Brown: Designing the English Landscape* (New York: Rizzoli, 2016).

5）Phillada Ballard, *An Oasis of Delight: The History of the Birmingham Botanical Gardens* (London: Gerald Duckworth & Co., 1983); R. Alison Hunter and Daniel Q. King, *Sheffield Botanical Gardens: A History* vol. 1, (Sheffield: Friends of the Botanical Gardens, 2017).

6）Kate Feluś, *The Secret Life of the Georgian Garden: Beautiful Objects & Agreeable Retreats* (London and New York: I. B. Tauris, 2016); Clare Hickman, *The Doctor’s Garden: Medicine, Science, and Horticulture in Britain* (New Haven & London: Yale UP, 2021).

7）Ray Desmond, *Kew: The History of the Royal Botanic Gardens* (London: Harvill Press, 1995); Kate Teltscher, *Palace of Palms: Tropical Dreams and the Making of Kew* (London: Picador, 2020); Brent Elliott, *The Royal Horticultural Society: A History 1804–2004* (Chichester: Phillimore, 2004).

8）Brent Elliott, “Flower Shows in Nineteenth-Century England,” *Garden History*, 29–2 (2001): 171–84; Elliott, *The Royal Horticultural Society*, Chapter 7.

9）Meynell, “The Royal Botanic Society’s Garden, Regent’s Park,” 135.

10）*The Royal Botanic Society of London*, 1841.

11）The National Archives, “The Gardens of the Royal Botanic Society of London, Inner Circle, Regent’s Park,” 1838 (Cres 2/754). 同じものが、City of Westminster Archives にも所蔵されている。

12）“Notes of a Visit to the Garden of the Royal Botanic Society, Regent’s Park,” *The Saturday Magazine*, 21 (1842): 92.

13）*Floricultural Magazine*, 1 (1837): 108.

14）Edward Kemp, *The Parks, Gardens, etc., of London and Its Suburbs* (London: John Weale, 1851) 66.

15）この湖は、同植物園内の湖であり、リージェンツ・パークの中央近くに位置する有名なY字形の湖とは別物である。

16）Elliott, “Flower Shows in Nineteenth-Century England,” 171.

17）Ibid., 172.

18）*The Scottish Gardener: A Magazine of Horticulture and Floriculture*, 5 (1856): 240–3.

19）Elliott, “Flower Shows in Nineteenth-Century England,” 174–5.

20）*The Journal of Horticulture, Cottage Gardener and Country Gentleman*, 32 (1877): 235.

21）Elliott, “Flower Shows in Nineteenth-Century England,” 176. また、1849年に始まったシャクナゲの exhibition は、クレマチスやローズ等の special exhibitions が導入される1874年まで続いた。*The Journal of Horticulture, Cottage Gardener and Country Gentleman*, 235を参照。

22）*The Gardeners' Magazine of Botany*, 2 (1850): 1; Elliott, “Flower Shows in Nineteenth-Century England,” 175–6も参照。

23）Kim Legate, “Shrubbery Planting (1830–1900),” *The Regeneration of Public Parks*, ed. Jan Woudstra and Ken Fieldhouse (London: E & FN Spon, 2000) 95–106.

24）*The Graphic*, 1887.

25）James Stevens Curl, *Spas, Wells, and Pleasure-Gardens of London* (London: Historical Publications Ltd., 2010); David Coke and Alan Borg, *Vauxhall Gardens: A History* (New Haven and London: Yale UP, 2011).

26）*The Garden: An Illustrated Weekly Journal of Horticulture in All Its Branches*, 36 (1889): 63.

27）Ibid., 160.

28）*The Gardeners' Chronicle*, 3rd ser., 8 (1890): 18.

29）Pamela Horn, *High Society: The English Social Élite 1880–1914* (Stroud: Alan Sutton, 1992) 13.

30）Ibid., 43.

31）Meynell, “The Royal Botanic Society's Garden, Regent's Park,” 141.

32）たとえば、*Quarterly Record of the Royal Botanic Society of London*, vol. 3, 1886–1888を参照。

33）チジックにあった植物園は、その後しばらくして解体され、現在は住宅地となっている。その住宅地の一角に Horticultural Road という名の路地が残っており、往時を偲ぶことができる唯一の痕跡となっている。

34）万国博覧会後にその収益金の一部を充当して周辺地域が開発されたが、この敷地もその一角にあり、王立園芸協会は、当敷地を「1851年博覧会王立委員会」（Royal Commission for the Exhibition of 1851）からリースしている。なお、この植物園も1882年に閉鎖され、跡地には現在は、Science Museum、Imperial College および the Royal College of Music が建っている。王立園芸協会の植物園は他に移され、現在は4箇所に植物園/庭園を所有している。なお、当園芸協会の有名なチェルシー・フラワーショーは、ロンドンにあるチェルシー王立病院を会場としている。

35）芝奈穂「19世紀中葉イギリスにおける温室の社会的意義――キュー植物園のパーム・ハウス（1848）建設を通して」『愛知学院大学文学部紀要』47 (2018): 17–26.

36）*Quarterly Record of the Royal Botanic Society of London*, 5.

37）たとえば、1886年のものは、Ibid., 14–16, 30–32, 46–48, 62–64を参照。

38）Ibid., 37, 52, 54, 120, 124, 220.

39）Elliott, *The Royal Horticultural Society*, Chapter 10–13.

40）*The Gardeners' Chronicle*, 2nd ser., 4 (1875): 684; Elliott, “Flower Shows in Nineteenth-Century England,” 182も参照。

41）Meynell, “The Royal Botanic Society’s Garden, Regent’s Park,” 141.
42）The National Archives, Work 16/1339.
43）Ibid.